

# 藤井達吉の手紙

——石川利一にあてた 62 通——

その 6 (終)

石川 博章  
愛知学泉短期大学

## Sixty-two Letters :

Fujii Tatsukichi's Correspondence to Ishikawa Toshiichi

Part 6 (final part)

Hiroaki Ishikawa

キーワード：藤井達吉 Fujii Tatsukichi、歌 *Tanka*、手紙 Letters

### 1. はじめに

本稿は「藤井達吉の手紙——石川利一にあてた 62 通——その 5」(石川 2007) に引き続き、藤井達吉の手紙を翻刻することを目的とする。今回掲載したのは、手紙「51」～「62」である。

手紙「57」には、歌集『遍路』のことが記してある。『遍路』は第一歌集『くさまくら』が出されてからほどなくして出された二冊目の歌集である。

### 2. 藤井達吉の手紙「51」～「62」

「51」

【消印】 昭和 37 年 6 月 14 日 碧南

【封裏】 藤井達吉先生作品展発起人一同／連絡  
先名古屋市東区久屋町／愛知県文化会  
館企画課内／加藤久明

【内容】 和紙(26.4×39.4)自筆原稿の印刷 1 枚  
他に趣意書 1 枚 (省略)

【本文】

謹啓／今度供養展を登といふことを皆様に御世話  
に／なるこ登とになりました／實は本年父の五十

回忌母の四十回忌兄妹の年忌と／重になりました  
ので、一昨年乃御芳志にて東京尔あ／りました  
祖先能墓を藤澤乃遊行寺に轉にじました／それは  
私をして藤井家を絶家となりますので出／来る  
限りのことを登思とつて致しました それで生き  
／残りの老姉登二人で何とか考へました結果  
いろいろ／登御生前尔御恩をうけました方々へ  
の供養現／在御繁榮の方々への御芳志へ乃御報  
恩 御清／祥と感謝を今生乃名残りに登存とじま  
して 四国遍／路を思ひたちました／供養登感  
謝と懺悔の旅を今生の名残りに捨て身／と申し  
ますか命がけ登申しますか 最早今生二／み禮  
んのない身でありますので實行致すこ登とに／し  
ました／出立前尔展観をとも存じましたがいろ  
いろ能都合／尔にて出かけることに致しました／  
いよいよ一兩日中になりまして何か書いて行け  
とのこ登／殊に無文無筆で御座いますが私とし  
ては實に感無量で御座い満春ます／若し命賜ひて帰  
られましたならば又別な人生観を／得ませう  
由る由る登清浄能旅 供養と感謝とザンゲ／の  
旅への門出二書にきました次第で御座います／  
愈々益々皆様の御清祥を心から御祈り申上げま  
す／拝具／藤井空翁

【解説】

この手紙は、「藤井達吉先生作品展」(7月13日から15日)の案内に同封された自筆原稿による印刷物の手紙である。達吉本人は供養展と称しているが、総合芸術研究会の松尾信資は、本人から春に300点以上の作品を愛知県文化会館(現在の愛知県美術館)に寄贈があった後、まだお披露目をしていないことから展覧をしたと記している。また、同じ期日で名古屋美術倶楽部で新作を展覧し、売り上げを達吉のために戸崎に家を移築した費用に役立てたと、松尾は告白している<sup>注1)</sup>。

「52」

【消印】昭和37年8月6日 岡崎

【封裏】岡崎市戸崎町十／藤井愚

【内容】和紙(26.2×39.2)自筆原稿の印刷1枚  
(自筆筆書きの追い書きあり)

【本文】

石川利一大人／日頃御無音御由るし被下度候／先月二十日旧居に参り候／この暑さ半死半生にて候 呵々／呉々も御清祥を祈り候／謹啓／猛夏の候 愈々御清祥の御事／何より目出度候 扱小生此／度 皆様の御芳志によりて左記の／處へ轉居仕候ことと相成申候／今後共よろしく御願ひ申上候／御知らせまでに／拝具／藤井達吉／愛知縣岡崎市戸崎町字東山／十番地十

【解説】

これは自筆の原稿を印刷した転居を知らせた手紙である。多くの方に出されたものであるが、初めに書かれている数行(「日頃御無音・・・」から「・・・を祈り候」まで)は、追い書きで、自筆である。

時候の挨拶部分は「初夏」と印刷してあったものを、自筆で「猛夏」と訂正してある。これは転居が予定どおりに進まなかったことを示している。達吉本人はこの手紙に自筆で「先月二十日旧居に参り」と記しているが、その点の詳細は、松尾が「吉浜の家を整理され、7月7日

に岡崎にうつられることになった。(中略)戸崎の家はまだでき上らぬので、しゅん工までは岡崎六供町の春谷庵の離れを借りて、滞在を願うことにした<sup>1)</sup>と事の詳細を書きしるしている。

「53」

【消印】昭和37年9月1日 岡崎

【封裏】お可散支<sup>かさき</sup>支／戸崎町十／愚翁

【内容】和紙(25.8×63.5)筆書1枚

【本文】

拝復候／御芳書拝受候／いよいよ御清榮の御事／目出度候／自然の力 今更ら<sup>に</sup>尔おもひ／今更ながら見直し可申候／人間 自然 宇宙／いやはや／過日 御作とおも布<sup>ふ</sup>／「しやくや久」の花の上に／薄紙をはって 御うた<sup>うた</sup>のの見事さ小生のだと／表具して箱書き参り候／何れ<sup>に</sup>尔て入手せしやとき、候／に 道具(屋)にてと申候 私<sup>に</sup>は／とてもこの様な文字書けず／もつと恵<sup>あ</sup>らい人のだと申て／返しやり候<sup>マア</sup>外<sup>に</sup>も一二参り候／それは小生のほ古の包紙を／洗ひたるなど／四十日の尼寺生活より轉行／トントンカンカン何する氣にも／なれず その上の持病哀れ<sup>に</sup>尔て候 呵々／御大切に祈り候 秋来り候／愚／石川大人 玉几下

【解説】

利一は、達吉の継色紙に倣い作品を作っていた。自ら下絵をこしらえ、自作のうたを書き添えるという具合である。もちろん手遊びなので、どうこうするものではなかった。しかし、この手紙には、それが回り回って、達吉の作として本人の元に、表具されて箱書き依頼に舞い込んでしまったのである。また、筆者も今までにいくつかの達吉作として出まわっている偽作を目にしたことがある。そうしたことが時々あったのであろう。

1ヶ月強をすごした春谷庵から、戸崎の家に移ったが、まだ造作が終了しておらず、大工仕事の音が五月蠅いことも記している。

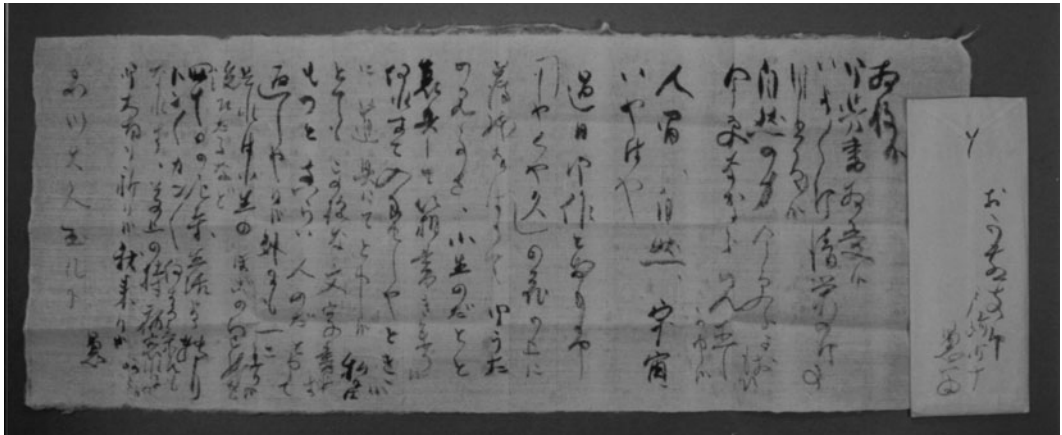


写真1 手紙53

「54」

【消印】昭和37年9月28日 岡崎

【封裏】九月廿八日／岡崎市戸崎町十／藤井愚

【内容】和紙(25.0×63.7)筆書2枚

【本文】

八十二年のへんろ人生観芸術観／そのうち申上べく候 へんろにて／結論候ことにて候 呵々／謹啓／中秋明月も過ぎ候／御清栄の御よし何よりにて候／廿六日御来訪して頂きましたのに／あや爾く徳川美術館展を拝／見に自動(車)をまはされ候てやむ／な(く)出かけ不在中 残念此上なく候／何か御不幸か御使ひとか<sup>注2)</sup> 何とも／失礼候 呉々も御大切二祈り候／野性／廿五日に松平の鮎やな<sup>に</sup>るよばれ候て／〔て〕途中発病廿七日はとても出／かけられぬとおもひ候ひしも 車が参り候／間 捨て身に参り候やはり途中にて／発病いやはやにて候 これが名古屋／行の最後とおもひ候 鮎梁も今生／の名残りにと御ちそうに相成候／来月中旬頃墓参までもはや／外出は仕るまじく候もはや永いこと／なき身何のみ連んも御座なく候も／今一度墓参丈けをとおもひ候／四国へんろより生きて帰れぬかく古にて候／ひしも生きて帰り申候<sup>注3)</sup> 一年有半神けい痛 此頃両足に参り／歩行中道にたをれ申有様にて／御元氣といはれ候も他人には痛さ／苦しさはわからず候 呵々／生

きてあるうちに 一度拝鳳仕度候／御訪ね申上べきに もはや勇氣／御座なく候／頂きもの仕候て恐縮にて候 名残の駄／作封入候 御笑被下度候／八十二年の夢にて候ひき／呉々も御自愛祈り候 御一同様二／よろしく御鳳声願上候 乱筆乱文御海容願上候／愚／石川利一大人 玉几下

【解説】

はじめの部分は、追書きである。彼の作品が同封されていたと思われるが、どの作品かは不明である。25、26、27日の期日が混同していると思われる。

「55」

【消印】昭和37年11月2日 岡崎

【封裏】十一月二日／岡崎市戸崎町十／藤井愚

【内容】和紙(25.2×63.5)筆書1枚

【本文】

拝復／久方ぶりにて御高説／拝ちよう萬謝候／後<sup>に</sup>考へれば いか<sup>に</sup>／老ひ堂りにて候／御由るし被下度候／御令姉様への御忌み申上／べきに失礼何便りの折／りにと存じ候／一日一日又一日と おひぼ連候／衰<sup>れ</sup>にて候／筆もつ氣持ちに／中々<sup>に</sup>爾な連須<sup>に</sup>／いやはや床<sup>に</sup>爾あ連八／たいくつ本見るともの／うく候／呉々も御大

切二<sup>に</sup>祈り候／紙のこと作物をな<sup>れ</sup>さ<sup>れ</sup>連川々道楽に  
こそと／おもひ候しかし小生／もうあまり永か  
らずおもはれ候／て何となく何もかも心急／が  
れ候 呵々／御一同様によるしく拝具／愚／石  
川大人 玉几下

【解説】

利一は9月26日に岡崎の達吉を訪ねたが、本人不在で、会えず、その後10月27日に再び訪問したことが日記から分かる。この手紙は、その礼状についての返礼の手紙である。文面から継色紙のことや、利一自身の制作のことなどを話したと思われるが、詳細は不明である。達吉自身も制作や健康のことで、不機嫌なことがわかる内容である。

「56」

【消印】岡崎局料金別納（速達）

昭和37年12月29日 碧南

【封裏】十二月廿八日／岡崎市戸崎町東山十／藤井達吉

【内容】自筆原稿コピー1枚(25.0×36.3)

(書き込みあり)

和紙(24.9×7.0)筆書1枚

【本文】

謹啓／本年もいよいよ押つまりましてさこそ御繁多の御事と／御案じ申上ます 呉々も御自愛を祈ります／扱て此度縣の方々はじめ皆様の一通りならぬ御芳志にて郷土二参りました もはや半年にもなります 厚く厚く／御礼申上ます／つきま志ては此度又々浪々の身となるべく小屋を／探して居ります見つかり次第轉居のやむなき／尔至りました／それは且つて三四十年前 東京<sup>に</sup>尔て美術界を／去るに及びまして 昔日の素人に還ると申ま／した 元々私<sup>に</sup>尔は恩師もなく弟子もありません／ので のどかに孤獨をして参りました／此度郷土へ参りますといろいろの誤解もありま／せう口しからぬことが中々に御座いました そ／れで昔日の素人に還

る必用を泌々とおもひ／ました 元より恩師もなく弟子もない身の／作者の友人が有ったにすぎませんでした それを／何等の勢力と誤解が多ありまして不快で／した／最早最晩年の小生何の野心もなく 只々静寂と／して何の目的もなく思ふがま、尔作をして見／たいそれ丈けです 目下の姉弟の生くる目的です／元より絶家の身の 一切の死後の仕度のしてある身です／名利<sup>に</sup>尔は何のか、わりはあり〈ま〉せん 食なくは死すと兼／々申して居ります通りです／人間はや<sup>に</sup>尔つけてもあ連古れですから 何れへか／隠れたい覺悟しました／中には名利にこだわらず純藝術を論じて楽しみ／にしてみる人が東京以来幾人かあります人生／一番嬉しいことです／残念ながら郷土では眞の理解の人は少数です／仕方ありません／お別れに及んで申わけなく思ひます 我儘を於／ゆるし下さいまし／何の用のない老姉弟がやり度けを静寂として／作って死<sup>に</sup>尔たいです／浪々漂々人生遍路の身最後をおゆるし下さ／いませ 何れに小屋に近い内にあると思ひます な／くば又漂々です思へば哀れでもある我儘です／最後に皆様の御繁榮を心から祈り御由るしをお願い申上ます／敬具／藤井達吉／愚翁／悲東の世の堂<sup>た</sup>非<sup>び</sup>禰<sup>ね</sup>可<sup>か</sup>散<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>て久<sup>く</sup>散<sup>さん</sup>方<sup>ほう</sup>久<sup>く</sup>羅<sup>ら</sup>／あ王<sup>わ</sup>連<sup>れん</sup>とおもへやは岐<sup>ぎ</sup>川<sup>かみ</sup>美<sup>み</sup>つ／ふと山花一枝描き候／御令妹御主人様の御靈前<sup>に</sup>二

【解説】

この手紙は、料金別納郵便でかつ速達であり、その上、中身は自筆の手紙をコピーしてあるので、多くの人にかなり急いで送ったものであることが伺える。また急いだため、誤字脱字がいくつもあり、コピー紙に筆書きで訂正している。健康がすぐれないのにそれを押して転居しようというのだから、この力は何処からでてくるのか、よほど腹にすえかねることがあるのであろう。松尾は、このときのことを、達吉は言葉も正常でなく、精神も幾分錯乱した状態であったと語っている<sup>注4)</sup>。よく語られる工芸振興活動

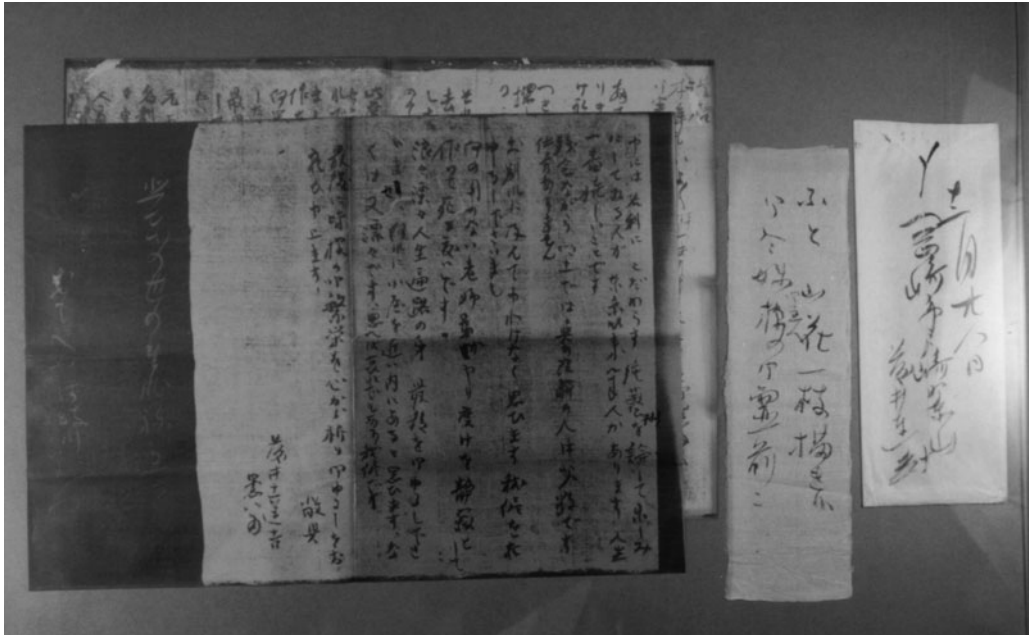


写真2 手紙「56」

のことで、両者の間に何らかのトラブルがあったことがわかる。現実には湯河原へ転居したのは4月であった。

このコピーは現在のトナーによる普通紙コピーではなく光沢のあるコピーで、最後に書かれたうたは、紙が途切れ黒くコピーされた部分に金泥を使って自筆で記されている。また「ふと山花・・・」の部分は別の紙片に自筆で記されている。他に画が同封されていたと思われる。

「57」

【消印】昭和38年9月18日 東京沼津間

【封裏】九月十九日／神奈川縣湯河原町吉浜／藤井愚翁

【内容】和紙(25.0×64.0)筆書1枚

【本文】

拝復仕候／すっかり秋の気分になりました／御一同様には愈々御多祥の御事／と存じ上げます  
呉々も御自／愛祈り上げます／歌集？／いやはや  
いやはや いやはや 今／更ら赤面でも御座  
います無學／文盲をさらけ出したことでした

／何共致し方御座いません／御丁重な御かん想  
拝受萬謝候／五六十部さし上げた内で御批評／  
を頂いた方は お二人丈けでした／尊臺をもつて  
第一の御批評 何／よりうれしく候ひき「泌  
」の御はがき／御念の入ったこと御はがきを  
頂いて／御手紙を見直しました／て、尔、を、  
は、めちやめちや尊意の字く／ばりめちやめち  
やこの位い無学なら／反って「御あいきょう」  
でした 今更ら／ながらです 日々朱字を入れて  
／みますが何とも言ひ様のない氣持／です  
本月中はかかります 眞の難行／苦行です 愚  
筆を能く味ひました／小供の時から文字がい  
やで小学四年／で退学したそのまゝ、八十三年で  
す／あの愚筆が讀めないで 説明書<sup>注5)</sup>が／出  
来る相です いやはや書きたかった／こと  
山々ですがやめました／「仏教美術六十年 ア  
ーソーガ」位いがよい〈で〉せう／笛は吹けど  
も—— 一切捨て切りました／ハハハハハ 愚  
翁奴／今朝伊豆や相模の海がはれてみます／皆  
様によろしく どうしても手紙が悪〈筆〉でか  
けません御由るしを／呉々も御大切二／愚翁／  
石川利一大人／玉案下

## 【解説】

達吉は37年4月28日から5月2日まで、姉と安藤繁和と春日井正義とともに5回目の四国遍路を行っている。歌集『遍路』は、それを基にして、当初は手書きで、近しい知友に配るために計画された。しかし、結局、歌の部分はオフセット印刷で仕上げられ、200部製作された。中身は前書きに続き、1頁に2首ずつ計62頁にわたり、124首が載っている。「いやはや書きたかったこと山々ですがやめました」と記しているが、「後記」「後書の後書」と、長々と自ら半生を振り返りいろいろと記している。達吉の字が判読できないので、追って『遍路解説書』も作られることとなった。これは小原の和紙に活版印刷である。解説書の末尾には、歌集が成るまでの経緯が記してある。



写真3 『遍路解説書』と 歌集『遍路』



写真4 歌集『遍路』の本文

## 「58」

【消印】昭和38年11月21日 湯河原

【封裏】十一月廿一日／湯河原町吉浜／藤井愚翁

【内容】和紙(19.8×93.0)巻紙筆書1枚

【本文】

拝復候／向寒ざりのみな岐里／大人にはいよいよ／  
 御清祥との御事／何よりにて候 猶吳／々も御  
 自重願上候／御芳書にて火花注6)のこと／いろ  
 いろとありがたく候／二三人をたのみ／漆に尔て  
 大体を描き／おへて目下仕上げ中にて候／松を  
 写真御とり被下候よ／し萬謝候注7)あまりの／  
 写実をさけて描き候／ちともう老には難作で／  
 今生の名残りにと存じ／実に困難仕候 病中／夏  
 中よりも秋とおもひしも／追々おもしろ可らず  
 一進一退が一日十度が／二十度になりこの屏  
 風にて遂に／一日五十度以上たを連申候／も  
 うこれ位いと十分覺／悟仕候て何の思ひ置くな  
 しにて候／今少くし) よき作をおもひ候も  
 力およばず氣のむくま、／に仕上げを致し居  
 候／如何とも仕方御座なく最々／晩年が郷土に  
 とは思はざりき尔て候 先づ先づ年／内はむ  
 づ可しとおもひ候／永いこと萬謝候 何の  
 報由ゆなく御由ゆし被下度候／萬一に尔ても何れ  
 へも一切御通／知申上ず候間 御了承願上候／  
 ハハハハハ 八十三年の夢よ／ある人の予言  
 三四十年来信ずる人／の暗示をうけ居り候／い  
 ふことなし尔て候／御達者で何よりですとの言  
 葉／や書状が大体にて候／十二日墓参候／最々  
 晩年の一作 来る處へ来た 駄／作封入候／御  
 礼までに／皆様によるしく 拝具／愚翁／石川  
 大人 玉几下

【解説】

最晩年の大作として愛知県美術館にある継色紙風屏風がよく知られているが、この手紙に触れられている作品は、それとは別のもので、あまり知られていない。それは、伊勢神宮より下賜された神代杉を革でつないだ屏風で、六扇の大作である。図柄は絵のみであり、表裏にそれ

ぞれ「太陽と大海」「権現の森と立物花火」が描かれている。絵の大作としては最も晩期のものと思われる。本文に「最々晩年が郷土にとは思はざりき」とあるとおり、碧南の大浜熊野神社に納められていたが、後年の失火により、半焼してしまった。

また、もう最後を迎えているといった手紙の文面に驚いた利一は、その後、湯河原へ本人を見舞っている。

「59」

【消印】昭和 38 年 12 月 17 日 神奈川吉浜  
(速達)

【封裏】十二月十七日／湯河原町吉浜／藤井愚

【内容】和紙(20.8×16.2)筆書 1 枚

【本文】

御無音候／御歳暮の／しるしまでに／愚

【解説】

作品が封入されていたので、速達郵便で、それがお歳暮という意味である。晩年は、多くの人にこうして郵送で、マクリの作品を送っていたと思われる。

「60」

【消印】昭和 39 年 1 月 13 日 湯河原

【封裏】一月吉日／湯河原町吉浜／藤井愚翁

【内容】代筆原稿によるガリ版印刷 2 枚(B4 上質紙)と和紙(26.0×32.3)筆書一枚

【本文】

庵庭も梅の香のみちて参りました／愈々御清祥の御こと、御慶賀申上げます／私は、昨年兎角病気勝ちにて とうてい新春を迎へるとは思ひもありません／でした。病中永いこと考へて参りまして、八十三年を、もの心つきまして、／嬉しいとか、楽しいとかを遂に存じませんでした。一生を苦悩とか、よく申／せば、寂々でした。日頃申します、夢でした。／あれこれ、

自分といふ人間の本質「サトレズ」己れを探し求め、あらゆる仕事／に手をつけまして、最後に少しでも国家的にと思ひまして数十年間、これも／ならず、初めて己れの至らざるを知りました。「遍路」に一寸書きましたが、仏／教美術六十年をして、「うんそうか」の一言に尽き、ある国家的の研究と申すよ／り苦悩数十年愚どん吾れ先々月にして、あゝ「そうか」と識りましたが、今更ら／に如何とも致し方ありません。一切を打捨て、あきらめ様と思ひ、ある名／士に拙文にて、大明けました。その返事に「一切を捨て、老後を明らかに生／きるこそよけれ、そして最後を絵画に単々と名利なく、思ひのまゝに筆の／まにまに」との返事でした。実に自分も考へて居る事でもあれ、眞にそれに／命の賜はる幾日を生かされ様と断定致して、実行に移りました。そして名を／〔を〕不徳の八十三年を語音にとり、無得庵とし愚助を決しました。あゝ良き哉／吾れを得たりと苦笑しました。そして静寂として一日一日と生かされませう。／思へば過去のあれ、身に過ぎた数十年労苦知る人ぞ知るでせうが、又人間／が思ふが俤にあれ変のない事でしょう。人間の眞実の命かけてのことも、先／方〈に〉それがなければ何んの価値はありません。利己の為め一切を消されます。／これも今更ではありません。要するに不徳の一語に尽きます。／夢よ去れ さあ静寂に心の向くまゝに名利なく単々と筆のまにまに／食と命の賜はるまゝ幾日を慶〈び〉て生かされます。万に一にも、春まで命賜はれ／ば、眞情もて駄作を愛して頂いた方が、昨冬赴かれましたことの切なさよ、／せめても茶会でもと願っています。願くば命たまわれば、名古屋まで参りま／す。御同意多く方々よろしく御願ひ申上げます。／私はその会を終りてその翌日、四国遍路に乞食の旅に出かけ度いと思ひ／ます。神よ、ゆるさせ給へと、合掌致します。／ふと思ひ出しました。音楽気狂ひ幾十年、子供の時、凧につける鯨の筋糸の／音と、松風の音、さざ波の音、風のまにまにの音律、私幾十年のそれ、

これ／以上なしと思ひます。／今一つ、如何なる宗教書も永い間、私の読んだ本よりも雑草と語るにしかず、と。 以上／無得庵／愚造／謹賀新年／一月吉日／愚造／石川利一先生

【解説】

長い本文は代筆による謄写版印刷で、青いインクで刷られている。末尾の謹賀新年から以下の部分は、和紙に自筆によるものである。この手紙にあるように、4月、覚王山の日泰寺で、支援者であった故飯野逸平氏の法要を行い、その後4月末に、結果的に最後となった四国遍路に旅立っている。「愚助」と「愚造」が混用されている。

「61」

【消印】 昭和 39 年 2 月 16 日 湯河原  
【封裏】 二月十五日／湯河原吉浜／愚助

【内容】 和紙(23.2×33.4)筆書 2 枚

【本文】

何といふ御無音にや御由る／し被下度候 先月／より又々一進一退二三／日立ち得ず御ざげいやはや／手紙三十通あまり何／れへも失礼候御由るし被下度候／梅もちり七嶋も見え候／春なり春なり／先日何よりのもの萬謝候／何が何やら夢にて候今更ながら／祢宜田氏もイキナ病氣／の〈よ〉し四百四病ほしく／御座なく候／御健祥何よりにて候／四月名古屋茶會三／四日前副知事氏来訪／岡崎と同時とのことにて候／生きてみたら参るべく候／へんろ乞食二浪々と／参り度候／人間にあはず候故に 呵々／皆様によるしく／拜具／愚助／石川利一大人玉几下

【解説】

「四月名古屋茶會」は故飯野氏の法要のことである。「岡崎と同時との」については、3月に、岡崎城郷土資料館で、作品展が催されているの

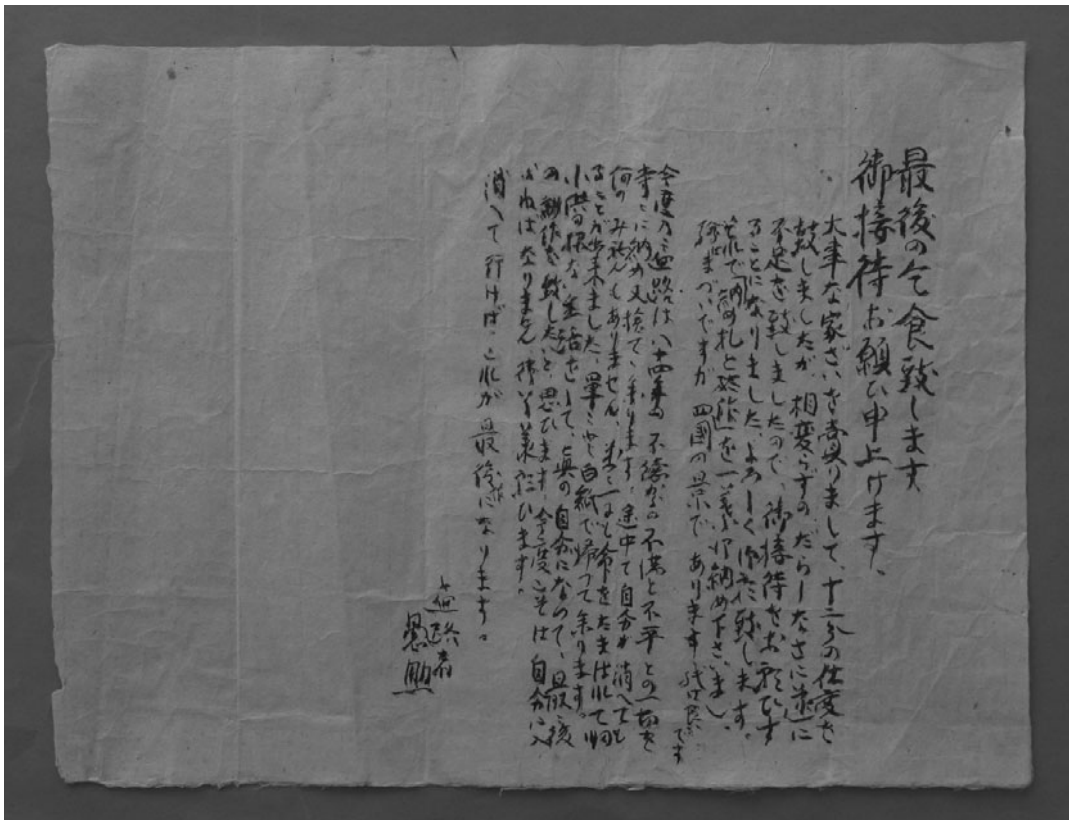


写真 5 手紙「62」



でそのことと思われる。

「62」

【消印】【封裏】封筒なし

【内容】和紙(34.8×45.5)自筆原稿印刷1枚

【本文】

最後の乞食致します／御接待お願い申し上げます  
 ／大事な家ざいを賣りまして、十二分の仕度を  
 ／致しましたが、相変らずのだらしなさに遂に  
 ／不足を致しましたので、御接待をお願いす  
 ることになりました。よろしく御願致します／  
 それで「納め札と駄作」を一葉御納め下さいま  
 し／絵はまづいですが、四国の景であります。  
 紙は良いです／今度乃遍路は八十四年の不徳か  
 らの不満と不平との一切を／寺々に納め又捨て  
 て参ります 途中で自分が消へても／何のみ禮  
 んもありません。萬々一<sup>に</sup>も命をたまはれて帰  
 ることが出来ました、単々<sup>マ</sup>登白紙で帰って参  
 ります／小<sup>マ</sup>供の様な生活をして、眞の自分にな  
 って、最後／の制作を致したいと思ひます。今  
 度こそは自分に入／らねばなりません。御了承  
 願ひます／消へて行けば、これが最後作にな  
 ります／遍路者／愚助

【解説】

四国遍路への旅立ちに先立って、接待(援助)を支持者に依頼した時のものと推測される。封筒がないが、作品と一緒に手渡しであったのか、または手紙「61」にある故飯野氏の法要後に行われた中村松楓閣での「藤井先生の会」で配布されたのかもしれない。以上の理由から手紙「62」とした。

### 3. おわりに

手紙「62」の後に、もう一度の手紙のやり取りが、あったようであるが、その手紙(昭和39年8月6日付)が紛失している。利一の記事によると、内容は岡崎の旧居への転居を知らせたも

のようである。その後、達吉が亡くなるのは8月27日である。その10日前、利一は岡崎に達吉を訪ねているが、日記には、「(達吉が)床中起きいで種々四方山話に花が咲き、一時半ごろ帰る」と記載があるだけである。

本人は、死の翌日、密葬によって茶毘に付されたが、本葬が、総合芸術研究会によって、8月30日に岡崎の昌光律寺で営まれている。写真6・7は、忌明けに際し、関係者に配られた印譜である。この印譜には、55影が掲載されている。

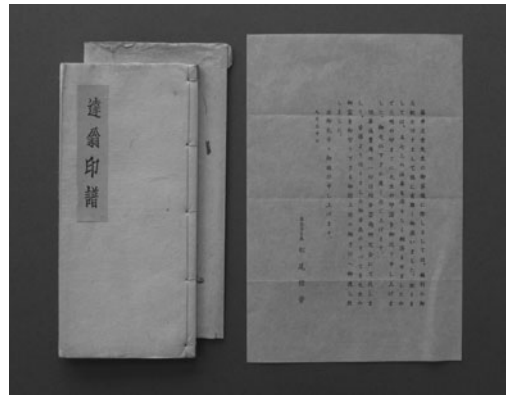


写真6 『達翁印譜』と挨拶文



写真7 『達翁印譜』最初のページ「之古久佐阿牟」「伊米」とある

本編(その6)でこの稿は完結となる。たった62通という事実であるが、正確な達吉像の描出にいくらかでも寄与することができたであろうか。また、祖父利一が関わったことについて、改めて感慨も抱いた。

それにしても、この一連の作業で、何度も脳裏に浮かんだことは、達吉にとって手紙を書くこととは何であったかという問いである。特に、彼の文字は流れるような筆使いではない。思いつくままを書きなぐり、ある時は心情がそのまま文字となって現れているという体である。常にいらだちを綴っていたようでもある。そして今、作業を終えて至った答えは、転居や遍路もそうであったように、精神的な行き詰まりを打破するための手段、生きるためのたずきであったということである。そして、そうした懊悩の日々は、先覚芸術家としての宿命であったのかもしれない。

本稿を出すのが思いのほか遅れてしまったが、擱筆することができて安堵している。誤りがあれば指摘していただけると有り難い。

#### 4. 謝辞

一連の「藤井達吉の手紙」を成すにあたって、故岡島良平先生、故奥谷秋夫氏をはじめ、達吉の会の皆様に貴重なご教示を賜った。記して謝意としたい。

#### 引用文献

1) 松尾信資編:『孤高の芸術家 藤井達吉翁』丸善(株) 59 (1965)

#### 参考文献

松尾信資編:『孤高の芸術家 藤井達吉翁』丸善 1965  
齋館建設特別委員会編:『権現 大浜熊野大神社齋館 参集館竣工記念誌』 1982

#### 注記

- 注1) 松尾信資編:『孤高の芸術家 藤井達吉翁』丸善(株) 59 (1965)
- 注2) このとき訪ねた達吉の住まいに、義兄の死を知らせる使者が来たことを言っている。
- 注3) 先の展覧会に先だって達吉は5回目の四国遍路をしている。
- 注4) 松尾信資編『孤高の芸術家 藤井達吉翁』丸善(株) 62 (1965)
- 注5) 『遍路解説書』のこと。写真3参照。
- 注6) 花火とは、熊野神社でかつて行われていた立物花火のことで、その資料を書き送ったことを指している。
- 注7) 画に使われる神社の現在の松の風景を写真にとって送ったことを指している。